

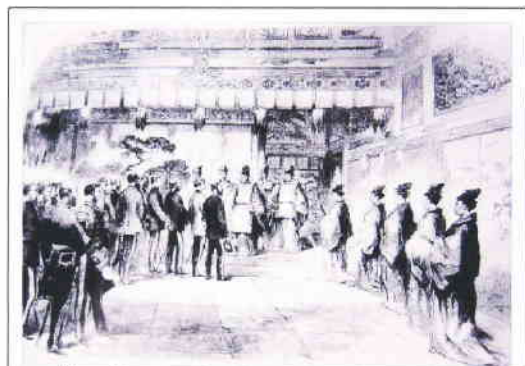
69 徳川期本丸御殿 白書院跡

- 本丸御殿内で大広間に次ぐ重要な間で、大広間より一回り小さい造りとなっています。P47の絵図をご参照ください。



70 徳川慶喜と外国公使謁見の地跡

- 慶応3年(1867)3月と12月、大坂城本丸御殿の中の「白書院」にて、徳川慶喜と外国公使との公式な謁見が行われました。



イギリス公使パークスと徳川慶喜の会見

71 明治天皇聖蹟碑／大阪臨時軍事病院跡

- 明治10年(1877)3月31日、明治天皇は大坂鎮台と臨時軍事病院に行幸され、西南戦争での傷病者を慰問されました。このとき、内閣顧問官だった木戸孝允が随行しています。木戸孝允は、この日から約2ヵ月後の5月27日、京都の自宅で病気により亡くなっています。



明治天皇



木戸孝允



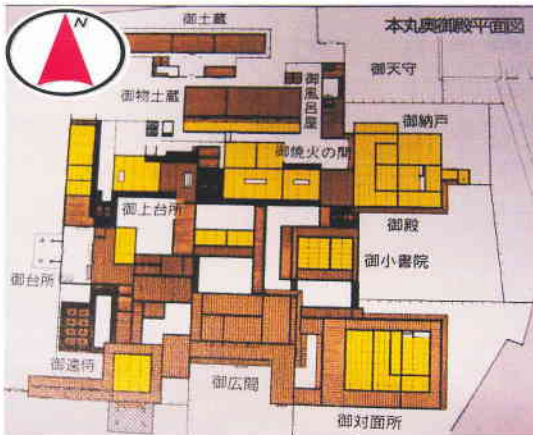
72 第四師団司令部の庁舎跡

- ▶ 昭和6年(1931)、天守閣の復興と併せて第四師団司令部の庁舎が大阪市民の寄付によって建てられ、現在もその建物が残っています。
当時、大阪城内に分散していた師団の庁舎がここに集約されました。
戦後、アメリカ軍の占領下となり、その後大阪市警、大阪府警として使用され、昭和35年(1960)から大阪市立博物館となりました。大阪市立博物館は大阪歴史博物館として生まれ変わり、現在の場所に移ったため平成13年(2001)3月に閉館となり、現在は建物のみが残っています。



73 豊臣期本丸奥御殿跡

- ▶ 豊臣期には本丸奥御殿がこの辺りにありました。
本丸奥御殿は、豊臣秀吉夫妻の日常生活用の御殿として使われていました。



74 豊公お手植樟樹碑

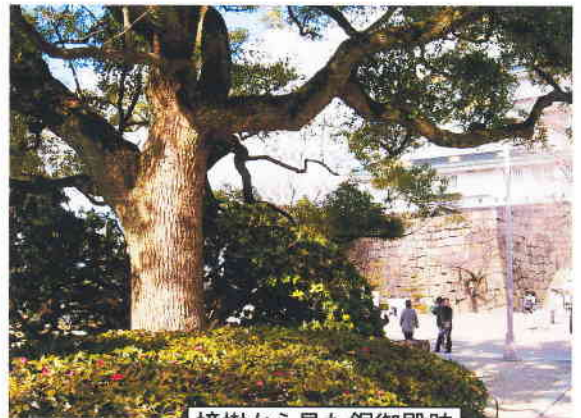
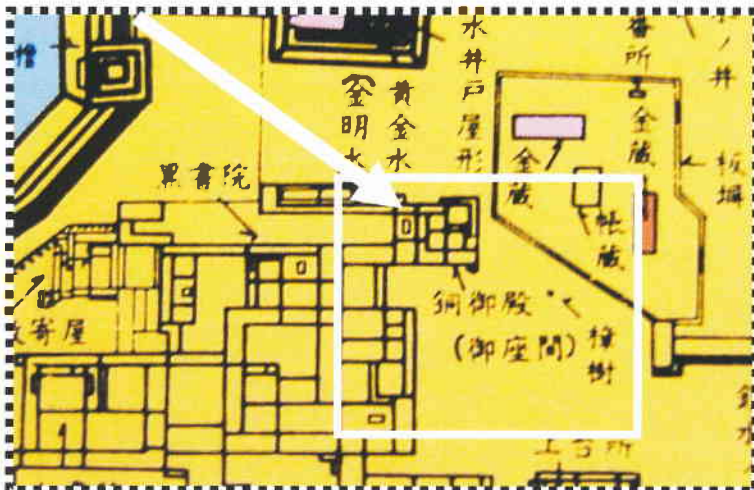
- ▶ 豊臣秀吉手植えと伝わる樟樹が明治の初めに焼失しましたが、明治期に新たに樟樹を植えるにあたり、陸軍中将(のちに陸軍大将)小川又治の撰文による碑が建てられました。碑文は次のような意味の文が記載されています。

天正十一年(1583)豊公大坂城を築く日に樟樹を此処に手植えし、繁茂したが二百八十年を経て、明治戊辰の兵火にかかり、今はただ枯株を余せり。予その跡地の湮滅(いんめつ)に帰せんことを惜しみ、更に同樹を植え、以て公の遺愛を存す。
後人幸に之を保護せよ



75 徳川期本丸御殿 銅御殿跡

- ▶ 銅御殿は將軍の私的な居間・寝所にあてられ、黒書院の東側にあり、本丸御殿の最も奥に存在しました。
銅御殿の場所は下記図面をご参照ください。
図面に樟樹とありますが、No.74の樟樹のことです。
銅御殿の場所は、その位置からやや北西になり、座石が置かれている辺りになります。



76 第14代将軍 徳川家茂終焉の地

- ▶ 第14代将軍 徳川家茂は、慶応元年(1865)閏5月25日に3回目となる大坂城入城を果たします。
慶応2年(1866)6月7日、第二次長州征伐の戦端がようやく切られますが、7月20日、家茂は大坂城内本丸御殿で病気のため息を引き取ります。21歳でした。
家茂が大坂城内で亡くなったことは非常に有名ですが、大坂城内のどこかについては、どの書物にも紹介されていません。天守閣は、寛文5年(1665)1月に焼失して以来再建されていませんので、天守閣内でないことだけは確実です。
この当時、天守閣とともに壮大な規模を有する本丸御殿が築かれていました。
寛永3年(1626)に創建され、天守閣焼失の際も、焼けずに幕末期まで残っていました。
この本丸御殿内に「銅御殿」と呼ばれる将軍の私的居間・寝所がありましたが、家茂が亡くなった部屋はここであるという可能性が非常に高いと思われます。



天守閣をカメラ撮影しようと、多くの観光客が立ち止まる場所こそ、14代将軍徳川家茂の終焉の地です。

77 金蔵(きんぞう)

- ▶ 金蔵は「かなぐら」とも呼びます。徳川期、幕府の金貨、銀貨を保管した土蔵で金庫の役割を果たしました。寛永3年(1626)に創建されましたが、当初二階建てだったものが、天保14年(1843)に現在の一階建てに改造されました。
火災と盗難防止に工夫がこらされ、床板の下は厚い石敷きで、入口は二重の土戸と鉄格子戸の三重構造になっています。

